

社会科 歴史的分野 No. 7	【第Ⅵ部 近代（後半）】二度の世界大戦と日本
	7 いわれなく殺された人びと

《教科書：p. 206-207, 210-211、資料集：p. 168》

【今回やること】関東大震災のとき、犠牲になったのは地震や津波による被害者だけではなかった。なぜこのようなことがおこってしまったのだろうか。

【資料】吉村昭『関東大震災』

《場面①「横浜市内で地震に遭遇した一外国人の手記」(p. 30～39より)》

私と妻は、道の中央を歩き、後ろから車夫が荷車をひいてついてきていた。その時、突然汽車が近くを走るようなゴーツという音響が押し寄せてくるのを耳にした。(中略)その瞬間、大地が発狂したような速度で互いに前後に引っぱり合うのを感じた。籬の上にある穀粒がふるわれるように、私たちははね上げられた。立ってはいられなかった。私と妻とは反対方向に数歩揺りはなされて、手を取り合うこともできなかった。そのうちに私たちは、家の垣根にたたきつけられ、互いに抱き合って垣根にしがみついた。車夫は、荷物に抱きついていて。見ると、周囲のあらゆるものがパチパチと物凄い音を立てて揺れ、家々はこわされてゆく。今通った道を振り返ると、家が倒れ石垣が崩れているのが見えた。また道の前方にある平屋の人家が、二、三度大きく左右に揺らいだと思った直後轟音をあげて路上に倒れた。

《場面②「東京で最も悲惨な光景を呈した陸軍被服廠跡の惨状」(p. 60～61より)》

地震発生後、附近の人々は続々と被服廠跡に避難してきた。かれらは、家財を周囲に立て、その中に家族がゴザなどをしいて寄り集っていた。地震が正午前であったので、遅い昼食をとる者もあって広大な空地に避難できた安堵の色がかれらの表情に濃く浮んでいた。そのうちに近くの町に火災が起りはじめ黒煙もあがったが、不安を感じる者はいなかった。避難者の数は時を追うにしたがって激増し、やがて敷地内は人と家財で身動きできぬほどになった。町々が徐々に焼きはらわれて、被服廠跡にも火が迫った。そして、火の粉が一斉に空地にふりかかりはじめると、一瞬、家財や荷物が激しく燃えだした。たちまち空地は、大混乱におちいった。人々は、炎を避けようと走るが、ひしめき合う人の体にぶつかり合い、倒れた者の上に多くの人々がのしかかる。炎は地を這うように走り、人々は衣服を焼かれ倒れた。その中を右に左に人々は走ったが、焼死体を踏むと体がむれているためか、腹部が破れ内臓がほとばしった。そのうちに烈風が起り、それは大旋風に化した。初めのうちは、トタンや布団が舞い上っていたが、またたく間に家財や人も巻き上げられはじめた。天和久まつさん(当時十八歳)は、眼前に老婆を背負った男がそのまま空中に飛び上るのを見たし、荷を積んだ馬車が馬とともに回転しながら舞い上るのを見た。大八車も、長持も人も飛び、空地に隣接した安田邸の塀の御影石などが人の群に降った。

